

〈原著論文〉

大学生における自己愛傾向とロールシャッハ変数との関連

医療法人香流会 絃仁病院 川崎 貴仁
中京大学心理学部 明翫 光宜

The relationship between narcissistic tendency and Rorschach test variables

KAWASAKI, Takahito (Koujin Hospital)

MYOGAN, Mitsunori (School of psychology, Chukyo University)

Summary

In this study, we investigated the relationship between narcissistic tendency and Rorschach test variables. A total of 344 university students completed a questionnaire survey consisting of the Narcissistic Personality Inventory-Short version (NPI-S); 50 students also participated in individual psychological assessments that included the Rorschach test. The results indicated that (1) subjects with a high sense of superiority and competence also were affected by the presence of others; (2) subjects with a strong need for attention and praise negotiate interpersonal fields with anxiety and a sense of superiority, observe the environment, and reflect on their conduct; (3) subjects with high self-assertion also have a strong reality-testing ability, and are sensitive to nuances in the environment.

Keywords: narcissistic tendency, Rorschach test variables, sense of superiority, sense of competence, need for attention, need for praise, self-assertion

問題と目的

(1) 自己愛とは

自己愛 (narcissism) は、ギリシャ神話の青年の物語を基にした用語であり、多くの精神分析家によって自己愛の概念は発展してきた。しかし、自己愛には、正常な自己愛と自己愛性パーソナリティ障害 (Narcissistic Personality Disorder 以下 NPD とする) に代表される病理的な自己愛とがあり、広く多義的な概念とされている。そもそも自己を愛するということ (自己愛) は、種を維持するために生得的にプログラムされた本能衝動の1つと考えられており (市橋, 2004)、我々にとって必要な概念なのである。

正常な自己愛の形成は、乳幼児期の無条件に愛される体験から自分がこの世に存在してよいという感覚を経て次の発達段階に進む (市橋, 2004)。その後、母子関係に代表される二者関係から父親も含めた三者関係、トイレットトレーニングに代表されるしつけの開始などの関係性の変化、子ども集団での関わりから自分は特別な存在ではないことの認識をその都度体験していく。正常な自己愛の発達は、自

己愛が肥大しては現実にはぶつかり壊されることの繰り返し (杉村, 2011) であり、この過程を経て市橋 (2004) や杉村 (2011) のいう等身大の自分に着地していくと思われる。

その過程の中で、健全な自己愛を保つことが難しくなるのが前思春期から青年期の時代である。この時期は精神分析家 Blos (1962) のいう第二の個体化の時期であり、両親からの精神的離脱と個の自立を基本的な課題としている。つまり、親と距離を取りながら同世代の友人関係の構築と社会的経験の積み重ねることから、この時期の青年は周囲からの承認を得ることを求めていく (齋藤, 2015)。そのため、この時期の友人関係の失敗は大きな挫折体験にもなりうることはよく知られている。相対的に過敏で傷つきやすいところを支えるために、この時期では自己愛が相対的に高まると言われている (齋藤, 2015)。つまり、青年期の内面ではアイデンティティの確立までの不安な時期を自ら支えるために自己愛を高めている状況 (自己愛傾向) であり、一方失敗や挫折はその高まった自己愛を傷つけることになるため、失敗に対する過敏性が高まる。この過敏な自己愛の傷つきをめぐって不登校などの臨床的問

題が生じることもある。

一方で自己愛の発達を促進する養育環境に恵まれなかった場合はどうなるであろうか。自分は無条件には愛されないという幻想を持つに至った子どもは、無力感や無価値観を防衛するために万能的な自己愛を發展させる道に進むこととなる(市橋, 2004)。その病理的な自己愛が展開していくとNPDの臨床像を形成するようになる。NPDは、「自分が重要であるという誇大な感覚」、「限りない成功、権力、才気、美しさ、あるいは理想的な愛の空想にとらわれている」、「過度な賛美を求める」、「特権意識」、「対人関係で相手を不当に利用する」、「共感性の欠如」、「しばしば他人に嫉妬する、または他人が自分に嫉妬していると思ひ込む」、「尊大で傲慢な行動、または態度」が主な行動特徴となる(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。ここでNPDの場合は、その人が空想や期待などの幻想の世界に閉じこもり、現実を見ないようにしている点が中核的な病理であると杉村(2011)は指摘している。

ここで正常な自己愛傾向とNPDとの関係について、整理しておきたい。それは、自己愛傾向はパーソナリティ特性であり、NPDはパーソナリティ障害であるということである。パーソナリティ特性は「環境および自分自身について、それらを知覚し、それらと関係をもち、それらについて思考する持続的様式であって、広範囲の社会的および個人的状況において示される(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)」(p. 637)と定義されている。一方、パーソナリティ障害とは「その人が所属する文化から期待されるものから著しく偏り、広範でかつ柔軟性がなく、青年期または成人期早期に始まり、長期にわたりかわることなく、苦痛または障害を引き起こす内的体験および行動の持続様式である(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)」(p. 635)と定義され、「パーソナリティ特性に柔軟性がなく、不適応的で、意味のある機能障害または主観的苦痛を引き起こされている場合だけがパーソナリティ障害ということになる(American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)」(p. 637)とも述べられている。自己愛でいえば、多くの人が青年期に自己愛の高まりを経験するが、自己愛の肥大化と脱肥大化を繰り返して等身大の自分に近づいていくのが正常な自己愛であり、一方自己愛の肥大化と現実否認で防衛し続けることが出来た場合がNPDにみられる病理的な自

己愛と杉村(2011)は述べている。そして病理的な自己愛は、万能的・理想的自己と無能的・無価値的自己に分極し、両極の間を大きく揺れ動き(市橋, 2004)、結果としてNPDの診断基準に見られるような行動特徴を示すといえる。さらに齋藤(2011)によれば、「以前から存在していた、あるいは現在獲得しつつある、パーソナリティ障害の原型的な特性が対人関係様式と社会機能の著しく偏った優勢で持続的な様式、すなわち障害として結晶化していくのか、それともこの年代における一過性の問題として通過していきけるのか」(p. 21)の臨界点が青年期前半期にあたるという。

本研究では、NPDといった病理的な自己愛ではなく、青年期である大学生が抱く自己愛傾向について取り上げる。従って、本研究では自己愛傾向を小塩(1998a)が述べた「自分自身への関心の集中と、自信や優越感など自分自身に対する肯定的な感覚、さらにその感覚を維持していきたいという強い欲求」(p. 34)として用いることとする。

(2) 自己愛人格目録

心理学のパーソナリティ研究では、Raskin & Hall(1979)が正常な人格特性として自己愛傾向を測定する目的で自己愛人格目録(Narcissistic Personality Inventory: NPI)の開発を行ったのを契機に多くの自己愛の質問紙研究が活発に行われてきた。NPIは研究者によって様々な形があるものの、青年期の自己愛人格を研究する上で必要なツールになっている(宮下, 1991)。日本でのNPIの因子構造が不安定であることが課題であったが、小塩(1998a)はNPI日本語版(大石・福田・篠置, 1987)から「優越感・有能感」、「注目・賞賛欲求」、「自己主張性」の3因子を抽出した。さらに小塩(1998a)はこの3因子は男女共通にみられ、複数の被調査者群においても同様な結果が得られているとも報告した。またNPI日本語版には難解な表現が含まれていることから、小塩(1999)は上記の3因子に対応し、より平易な項目群からなる自己愛人格目録短縮版(Narcissistic Personality Inventory-Short version: NPI-S)を作成し、様々な研究において活用されている。

自己愛傾向研究の知見として、実証的な知見に基づく理論モデル(力動的自己制御モデル、エージェンシーモデル、自己愛的賞賛・対立理論など)がいくつか提案されている。川崎(2019)によれば、こ

これらの理論の共通点として、顕在的には誇大的だが潜在的には否定的な自己概念を持つこと、賞賛を求めて行動するが社会的な失敗を防ごうと敵対的な対人関係を持つてしまうこと、親密さや親切さ（共同性）よりも物事の達成や独立性（作動性）を志向することなど、同一個人内で複数の心理システムが並行して機能し、かつ相互に矛盾を起こしているという。さらに、川崎（2019）は、自己愛傾向への短期介入研究を展望し、自己愛傾向は一定の状況に応じてその表現は変わりうること、他者との共同性や共感性が基盤的に失われているわけではなく、刺激状況によって活性化されればそれに応じた心的プロセスが発揮されるなどの臨床実践の示唆をまとめている。現在、自己愛傾向は対人関係を困難にする一つのパーソナリティ特性であるが改善することが可能と考えられている。ただし、正常な自己愛と病理的な自己愛の違いなどについては調査研究ではまだ実証されていないため、先述した臨床家による示唆にとどまっているともいえる。

(3) 自己愛とロールシャッハ変数との関連

自己愛とロールシャッハ変数との関連についての先行研究は、NPDを対象にした研究が多い。Hilsenroth, Handler & Blais (1996) の展望論文によると NPD のロールシャッハ研究は以下の2つの方向性がある。1つは自己愛の概念そのものが精神分析の歴史とともに発展してきた経緯もあり、ロールシャッハ研究も防衛機制や対象関係を記号化して他のパーソナリティ障害群との比較を行った研究がみられる。Lerner (1998 溝口・菊地監訳 2003) によれば、NPD 患者は境界性パーソナリティ障害の防衛構造とは異なり、誇大感、自己万能感、原始的理想化が中心となっている点、他者との関わりが境界性パーソナリティ障害のような混とんとした原始的なものではないが他者を自己の延長としてみているという点が特徴である。本邦では、堀内他 (1991) や七里・橘 (1995) の研究がある。堀内他 (1991) は、NPD とロールシャッハ・テスト（以下ロ・テストとする）の関連を検討した結果、NPD 患者の特徴として、外的な情緒刺激に揺さぶられやすく ($FC < CF + C$)、反応内容を述べる際に個人的経験を述べる Personal Response（以下 PER）が多いことを報告している。この PER は、反応を正当化したり明確化するための根拠の1つとして個人的な知識や体験を引き合いにした反応である。さらに堀内他 (1991)

は反応産出の際に過剰な修飾 (over elaboration) や華やかな空想・理想化・肯定的自己像などが見られたことを指摘している。これは海外の知見とも一致する。七里・橘 (1995) は2例の NPD の事例研究から、反応数が少なく、全体反応は優位、色彩反応が少ない、形態水準指標はやや低め、形態水準がマイナスの反応が1個は存在するという特徴を挙げ、抑制のかかった状態であると報告している。ここで抑制のかかった状態とは、連想活動の生産性や外的刺激を受け入れる体験様式が制限されていることを意味する。七里・橘 (1995) は、この状態について自己愛が傷つき挫折している生活史と関連して抑うつ状態にあることを考察している。継起分析ではⅡ図版で特異な反応がみられること、情緒的負荷を受けた図版では主観性が強まり過度の破壊的表現や明細化を行うこと、検査態度に不自然さがみられることを示唆している。

もう1つの方向性として包括システムのコード（スコア）を比較した数量的研究である。Nezworski & Wood (1995) の包括システムにおけるレビュー論文では自己中心性指標、反射反応、ペア反応が自己焦点づけおよび自己愛の指標とされてきたが、安定した結果が見られないことが指摘されている。Hilsenroth, Fowler, Padawer & Handler (1997) は、(NPD 群を含む) パーソナリティ障害群 (91名) と非患者群 (50名) を対象にロ・テストを実施し、比較を行った。その結果、反射反応、自己中心性指標、PER、Lerner の理想化において NPD 群が他の群よりも有意に高いことを報告した。また DSM-IV における NPD の診断基準への該当数や MMPI-2 の NPD 尺度との有意な相関から、Hilsenroth et al. (1997) は反射反応と理想化が NPD 患者の鑑別に臨床的に有用であろうと述べている。Blais, Hilsenroth, Castlebury, Fowler & Baity (2001) は、(NPD 群を含む) パーソナリティ障害群 (57名) に対してロ・テストと MMPI-2 を用いてパーソナリティ障害の診断に対する有効性を検討した。その中で NPD 群における反射反応と MMPI-2 の自己愛性人格尺度が NPD 診断の予測において有意な効果を報告している。Gritti, Marino, Lang & Meyer (2018) は、同じくパーソナリティ障害と健常群を対象にロ・テストとパーソナリティ障害のアセスメントツールである SWAP-200 を実施し、NPD 患者群の自己中心性指標 ($(3Fr + (2))/R$) ($r = .38, p < .01$) と PER ($r = .51, p < .01$) が自己愛に関する項目との間に関連が見られたことを報告し

ている。先行研究で指摘された反射反応 (Fr) とは、図版の対称性から「水面に映った動物」や「ここに人間がもう一方は鏡に映った人です」などのように鏡映像を述べた反応である。理想化は、Lerner 防衛尺度 (Lerner, 1998) に収録されているスコアであり、ある対象の望ましくない特性を否認し、その人自身のリビドーや万能感をその対象に投影することで、その対象の価値を高める内容に対してスコアする。

これまでの研究は NPD を対象にした臨床研究であるが、大学生を対象にした研究が1つみられる。Kathleen (2000) は Hilsenroth et al. (1997) で有効性が示された自己愛のスコア (反射反応, 理想化) が大学生196名のデータにおいても再現されるか検討を行った。その結果、この2つのスコアと MMPI-2 の NPD 尺度との間に正の相関関係が認められなかった。Kathleen (2000) は、大学生の中において理想化は病理的な自己愛よりも適応的な対人機能と関連するのではないかと考察している。

以上を総括すると自己愛のロールシャッハ指標として、反射反応や自己中心性指標、理想化、PER との関連性を示す研究は複数見られるようである。しかし、そのほとんどの研究が NPD を対象とする臨床群であり、一般青年の自己愛的傾向に関するロールシャッハ反応の知見が1つしかない。正常な自己愛と病理的な自己愛の比較からパーソナリティの構造的な違いがあるように予想された。そこで、NPD でのロールシャッハ研究の知見が自己愛傾向の高い一般大学生においてもみられるかという点、そして自己愛傾向の高い一般大学生に特徴的なロールシャッハ反応がみられるかという点を検討する必要がある。本研究では数量的分析の観点に立ち、一般大学生の自己愛傾向とロールシャッハ・テストとの関連を検証することを目的とする。

方法

(1) 調査協力者

質問紙調査協力者は、A県に通う大学生344名であった。性別の内訳は男性91名、女性253名であった。平均年齢は18.97歳 ($SD=1.10$) であった。そのうち、個別調査に参加した協力者は53名であった。性別の内訳は男性8名、女性45名であった。

(2) 手続き

2019年4月上旬、講義終了後に個別調査参加募集用紙が添付された質問紙を配布し、個別調査の協力者の募集を行った。後日、個別調査協力の同意を示した人に個別調査を実施した。個別調査は2019年4月下旬から2019年8月上旬に実施した。

(3) 質問紙調査

質問紙はフェイスシート、自己愛人格目録短縮版 NPI-S (小塩, 1999)、個別調査参加募集用紙で構成されていた。

フェイスシートには、研究目的、データの取り扱い、調査不参加や途中辞退が可能であること、個人情報の保護について記載し、性別、年齢の記入を求めた。

自己愛人格目録短縮版 NPI-S (以下 NPI-S とする) は30項目で構成され、「とてもよく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5件法であった。下位尺度は注目・賞賛欲求、優越感・有能感、自己主張性の3つであり、各10項目で構成されている。質問項目については小塩 (1999) にならった。

個別調査参加募集用紙には、研究目的と個別調査への参加募集、調査不参加や途中辞退が可能であること、個人情報の保護について記載し、連絡先の記入を求めた。

(4) 個別調査および結果の分析

個別調査では、大学の実験室にて、ロールシャッハ・テストを行った。反応の記号化は包括システムに準拠した。個別調査の実施・採点はロールシャッハ・テストの経験が15年以上の臨床心理士の指導の下、筆者 (川崎) が行った。また、ロールシャッハ・テストのスコアリングはスコアリングの妥当性を確保するため臨床心理士の資格を有する指導者とともに行った。形態水準の評定については基本的に Exner の形態水準表 (Exner, 1995 中村・津川・店網・丸山訳 2004) に準拠した。また、文化差による影響も考慮して高橋・高橋・西尾 (2002) の形態水準表も参照した。

統計的分析には、IBM SPSS Statistics20®を用いた。なお、包括システムでは反応数が13個以下の記録については、信頼性がなく、解釈の妥当性に欠けると判断し、原則的にはデータとして採用しない (Exner, 2003 中村・野田監訳 2009)。従って反

応数が13以下の者は分析対象から除外し、50名を分析対象とした。

NPI-S とロールシャッハ変数との関連性の検討について、NPI-S の下位尺度と各ロールシャッハ変数との間で相関分析を行った。なお、ロールシャッハ変数は数値によって解釈の意味が異なるものが多いため、相関分析による両者の関連性だけではなく、自己愛傾向高・低群におけるロールシャッハ変数の代表値(平均値や中央値)の比較が不可欠であると考えられた。そこで個別調査に参加した50名のNPI-S の下位尺度の中央値で高低群に分け、各ロールシャッハ変数の比較を行った。

(5) 研究の倫理的配慮

本研究の実施においては、中京大学研究倫理委員会の承認を得た。個別調査参加者には実施前に、研究目的、研究方法、実施時間、参加辞退の際の不利益防止への配慮、参加辞退の機会保障、個人情報の保護、緊急事態の対応について書面で説明し、以上の研究参加について同意書にて同意を得た。

結果

(1) NPI-S の基礎データ

本研究における質問紙調査参加者全員のNPI-S に天井効果及び床効果は見られなかった。NPI-S 全体の平均値は82.84 ($SD=17.58$)、注目賞賛欲求の平均値は28.03 ($SD=7.85$)、優越感・有能感の平均値は26.04 ($SD=7.67$)、自己主張性の平均値は28.07 ($SD=7.70$)であった。NPI-S を作成した小塩(1998b)の研究では、大学生520人を対象にNPI-S を行った結果、全体の平均値は87.39 ($SD=14.32$)、注目賞賛欲求の平均値は31.66 ($SD=6.75$)、優越感・有能感の平均値は29.91 ($SD=6.31$)、自己主張性の平均値は25.82 ($SD=5.80$)であった。

また同時にNPI-S 下位尺度の独立性も考えられたことから、本研究では下位尺度ごとにロールシャッハ変数との関連を検討する。

(2) NPI-S 下位尺度とロールシャッハ指標との関連

NPI-S の下位尺度である優越感・有能感、注目賞賛欲求、自己主張性とロールシャッハ変数とのPearson 積率相関係数を算出した (Table 1)。

優越感・有能感との間に有意な相関関係が認められたのはFC ($-0.314, p<.05$)、Fr ($-0.302, p<.05$) と2つの変数のみであった。

注目賞賛欲求との間では、Y ($-0.311, p<.05$)、(Ad) (.297, $p<.05$)、Bt ($-0.305, p<.05$)、AB (.418, $p<.05$)、PSV ($-0.282, p<.05$)、PTI ($-0.301, p<.05$) が有意な関連が認められた。

自己主張性との間では、SumY (.292, $p<.05$)、X+% (.329, $p<.05$)、Hh ($-0.318, p<.05$) が有意な関連が認められた。

次に個別調査に参加した50名のNPI-S の下位尺度の中央値で高低群に分け、各ロールシャッハ変数の比較を行った。統計的分析においては正規分布を仮定しないノンパラメトリック検定のU検定を行い、効果量 (r) を算出した。

まず、優越感・有能感得点の高群 (25名)、低群 (25名) におけるロールシャッハ変数の比較は以下になる (Table 2)。

Table 2より、優越感・有能感得点の高低群の間で有意な差がみられたのは、(Ad) ($U=235.5, p<.05, r=.33$)、INC1 ($U=230, p<.05, r=.28$)であった。(Ad) が高群、INC1は低群がそれぞれ有意に高かった。

次に、注目賞賛欲求得点の高群 (26名)、低群 (24名) におけるロールシャッハ変数の比較は以下になる (Table 3)。

Table 3より、注目賞賛欲求得点の高低群の間で有意な差がみられたのは、DQo ($U=193, p<.05, r=.33$)、VF ($U=260, p<.05, r=.30$)、Mp ($U=229, p<.05, r=.28$)、(Ad) ($U=231, p<.05, r=.35$)、An ($U=217, p<.05, r=.30$)、CDI ($U=207, p<.05, r=.30$)であった。DQo、Mp、Anにおいては低群が有意に高く、VF、(Ad)、CDIにおいては高群が有意に高かった。

最後に、自己主張得点の高群 (26名)、低群 (24名) におけるロールシャッハ変数の比較は以下になる (Table 4)。

Table 4より、自己主張得点の高低群の間で有意な差がみられたのは、FY ($U=211, p<.05, r=.29$)、YF ($U=228, p<.05, r=.30$)、SumY ($U=184.5, p<.05, r=.36$)、es ($U=203.5, p<.05, r=.3$)、Hh ($U=212.5, p<.05, r=.30$)、Sc ($U=224.5, p<.05, r=.28$)であった。FY、YF、SumY、es、Scについては高群が有意に高く、Hhについてのみ高群が有意に低かった。

Table 1 NPI-S 下位尺度とロールシャッハ変数との相関関係

	優越感有能感	注目賞賛欲求	自己主張性		優越感有能感	注目賞賛欲求	自己主張性
R	-.081	-.211	-.080	X+%	.238	.045	.329*
W	-.183	-.070	-.153	WDA%	.096	.069	.203
D	.158	-.161	.080	XA%	.091	.036	.212
Dd	-.137	-.164	-.048	X-%	.016	.012	-.130
S	-.250	-.181	-.164	Xu%	-.222	-.023	-.261
DQ+	-.054	.011	.025	S-%	-.232	-.070	-.089
DQo	-.028	-.269	-.089	Isolate	-.267	.021	-.048
DQv/+	.014	.040	.054	H	-.051	.067	-.004
DQv	-.185	-.037	-.126	(H)	.015	-.057	.183
FQ+	-.066	-.051	.122	Hd	.005	-.001	.100
FQo	.149	-.227	.202	(Hd)	-.084	-.112	.011
FQu	-.159	-.140	-.182	Hx	.127	.092	.185
FQ-	-.119	-.169	-.150	AllH	-.017	-.027	.133
M	-.062	-.031	.133	A	-.040	-.095	-.024
FM	.009	-.022	-.090	(A)	.016	.052	0.000
m	-.028	.049	.100	Ad	-.149	-.220	-.250
FC	-.314*	-.231	-.168	(Ad)	.128	.297*	.101
CF	-.074	-.080	-.028	An	-.035	-.237	.032
C	-.103	-.044	-.117	Art	-.085	.006	-.156
WSumC	-.258	-.190	-.164	Ay	-.156	-.147	-.051
FC'	-.100	.043	-.053	Bl	-.081	-.167	-.010
C'F	-.012	.166	.065	Bt	-.232	-.305*	-.173
C'	.054	.009	.180	Cg	-.146	.071	-.110
WSumC'	-.085	.087	-.009	Cl	-.239	.008	-.121
FT	-.209	.029	-.175	Ex	.265	.016	.022
TF	.121	.118	.142	Fd	-.062	.041	-.121
WSumT	-.179	.054	-.142	Fi	.061	.153	.151
FV	.080	-.005	.062	Ge	.156	-.115	-.079
VF	.030	.275	.223	Hh	-.231	-.118	-.318*
V	-.167	-.155	-.053	Ls	-.083	.098	.081
SumV	.053	.064	.125	Na	-.203	.030	.031
FY	-.016	-.232	.194	Sc	.037	.202	.266
YF	.123	.085	.228	Sx	.001	-.114	.086
Y	.074	.311*	.168	Xy	.080	.201	.014
SumY	.049	-.090	.292*	Idio	-.014	.243	-.020
F	.022	-.213	-.127	DV2	.161	.227	.308
FD	-.048	.100	.066	INC1	-.236	-.044	-.087
Fr	-.302*	.163	-.117	INC2	-.003	.270	.018
rF	.057	.048	.108	DR1	-.107	-.145	.009
(2) ベア	.112	-.170	.196	FAB1	-.180	-.055	-.079
3r+(2)/R	-.039	.109	.199	FAB2	.019	.269	.019
Lambda	.007	.019	-.152	ALOG	.121	.033	-.076
EA	-.178	-.138	.009	AB	.008	.418*	.074
es	-.046	.032	.066	AG	.138	-.131	.224
D	-.004	-.109	-.046	COP	-.031	-.008	.107
AdjD	-.018	-.101	.177	CP	.147	-.188	.244
a	-.012	.052	.078	MOR	-.176	-.136	-.159
p	-.020	-.075	.013	PER	.085	-.013	.063
Ma	-.067	.054	.164	PSV	-.185	-.282*	-.050
Mp	.010	-.141	.051	GHR	.081	.065	.236
Intellect	-.107	.120	-.093	PHR	-.077	-.074	.040

	優越感有能感	注目賞賛欲求	自己主張性		優越感有能感	注目賞賛欲求	自己主張性
Zf	-.161	-.135	-.141	WSum6	-.154	.106	-.028
Zd	-.167	.076	-.030	S-CON	-.062	.095	-.037
Afr	-.173	.014	-.052	PTI	.016	.301*	.002
Popular	.043	-.056	-.041	DEPI	.018	-.108	.060
				CDI	.112	.067	-.005
				HIV	.130	.074	-.029
				OBS	-.279	-.189	-.124

*...p<.05 **...p<.01

Table 2 優越感・有能感得点の高低群におけるロールシャッハ変数の比較

	低群 (N=25)			高群 (N=25)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
R	22.60	6.13	19.0	21.52	5.07	20.0	n.s.	.05
W	11.80	4.69	12.0	10.56	4.02	10.0	n.s.	.09
D	7.56	3.74	8.0	8.40	3.41	8.0	n.s.	.05
Dd	3.24	1.99	3.0	2.56	1.55	2.0	n.s.	.12
S	2.92	1.59	2.0	2.12	1.44	2.0	n.s.	.23
DQ+	3.20	2.24	2.0	2.76	2.01	2.0	n.s.	.09
DQo	16.52	4.54	16.0	16.32	4.14	15.0	n.s.	.03
DQv/+	0.28	0.45	0.0	0.40	0.58	0.0	n.s.	.10
DQv	2.72	1.49	3.0	2.04	1.33	2.0	n.s.	.18
FQ+	0.40	0.61	0.0	0.40	0.64	0.0	n.s.	.03
FQo	11.64	2.29	11.0	12.32	2.49	12.0	n.s.	.17
FQu	7.40	3.70	6.0	5.68	2.66	5.0	n.s.	.17
FQ-	3.28	2.10	3.0	3.12	2.16	2.0	n.s.	.04
M	1.76	1.51	1.0	1.48	1.41	1.0	n.s.	.07
FM	2.08	1.22	2.0	2.36	1.74	2.0	n.s.	.02
m	1.40	1.07	1.0	1.16	1.11	1.0	n.s.	.13
FC	4.12	1.25	4.0	3.52	1.30	4.0	n.s.	.21
CF	1.48	1.17	1.0	1.16	1.11	1.0	n.s.	.15
C	0.36	0.58	0.0	0.20	0.32	0.0	n.s.	.02
Cn	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
WSumC	4.08	1.69	3.0	3.22	1.27	3.0	n.s.	.19
FC'	2.48	1.26	2.0	2.44	1.49	2.0	n.s.	.03
C'F	0.08	0.15	0.0	0.28	0.47	0.0	n.s.	.13
C'	0.04	0.08	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	0.00
WSumC'	2.60	1.26	2.0	2.76	1.65	2.0	n.s.	.01
FT	0.68	0.76	0.0	0.48	0.65	0.0	n.s.	.12
TF	0.00	0.00	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.20
T	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
WSumT	0.68	0.76	0.0	0.56	0.72	0.0	n.s.	.07
FV	0.28	0.45	0.0	0.40	0.58	0.0	n.s.	.10
VF	0.08	0.15	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	0.00
V	0.04	0.08	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	.14
SumV	0.40	0.58	0.0	0.48	0.65	0.0	n.s.	.05
FY	1.40	1.09	1.0	1.24	0.89	1.0	n.s.	.05
YF	0.28	0.40	0.0	0.32	0.46	0.0	n.s.	.01
Y	0.04	0.08	0.0	0.16	0.28	0.0	n.s.	.15
SumY	1.72	1.01	2.0	1.72	1.37	1.0	n.s.	.03
F	9.28	3.70	8.0	9.44	3.12	9.0	n.s.	.04
FD	0.68	0.76	0.0	0.52	0.62	0.0	n.s.	.08

	低群 (N=25)			高群 (N=25)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
Fr	0.44	0.60	0.0	0.16	0.28	0.0	n.s.	.24
rF	0.00	0.00	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.14
(2) ベア	6.04	2.53	5.0	6.12	2.24	6.0	n.s.	.01
3r+(2)/R	0.34	0.11	0.3	0.32	0.11	0.3	n.s.	.07
Lambda	0.99	0.63	0.7	0.93	0.46	0.8	n.s.	.09
EA	5.64	2.40	5.5	4.66	2.27	4.0	n.s.	.17
es	8.88	3.41	9.0	9.04	4.13	9.0	n.s.	.02
D	-0.96	1.00	-1.0	-1.24	1.07	-1.0	n.s.	.13
AdjD	-0.28	0.98	0.0	-0.64	0.93	0.0	n.s.	.01
a	3.96	1.88	4.0	3.88	2.51	3.0	n.s.	.04
p	1.24	1.35	0.0	1.12	1.46	0.0	n.s.	.09
Ma	1.28	1.22	1.0	1.04	0.94	1.0	n.s.	.07
Mp	0.44	0.56	0.0	0.40	0.61	0.0	n.s.	.10
Intellect	1.40	1.70	0.0	0.92	1.03	0.0	n.s.	.03
Zf	13.32	5.24	13.0	11.64	4.61	10.0	n.s.	.12
Zd	0.38	3.73	1.0	0.22	2.99	0.5	n.s.	.01
ColShdBld	0.59	0.17	0.6	0.59	0.20	0.5	n.s.	.06
Afr	0.58	0.17	0.6	0.59	0.20	0.5	n.s.	.01
Popular	3.00	0.88	3.0	3.04	0.85	3.0	n.s.	.05
X+%	0.55	0.09	0.6	0.62	0.13	0.6	n.s.	.24
WDA%	0.87	0.08	0.9	0.88	0.08	0.9	n.s.	.09
XA%	0.86	0.08	0.8	0.86	0.08	0.9	n.s.	.07
X-%	0.14	0.08	0.2	0.16	0.11	0.1	n.s.	0.00
Xu%	0.30	0.10	0.3	0.25	0.08	0.3	n.s.	.15
S-%	0.16	0.21	0.0	0.07	0.11	0.0	n.s.	.17
Isolate	0.20	0.10	0.2	0.17	0.08	0.2	n.s.	.06
H	1.56	1.27	1.0	1.20	1.14	1.0	n.s.	.13
(H)	0.96	0.84	1.0	1.00	0.88	1.0	n.s.	0.00
Hd	1.52	1.27	1.0	1.56	1.32	1.0	n.s.	.01
(Hd)	0.64	0.82	0.0	0.40	0.51	0.0	n.s.	.03
Hx	0.12	0.21	0.0	0.36	0.66	0.0	n.s.	.06
AllH	4.88	2.74	3.0	4.88	2.52	4.0	n.s.	.03
A	7.56	2.19	7.0	6.64	2.35	7.0	n.s.	.06
(A)	0.44	0.53	0.0	0.44	0.56	0.0	n.s.	.04
Ad	2.32	1.48	2.0	2.04	1.80	2.0	n.s.	.07
(Ad)	0.04	0.08	0.0	0.56	0.81	0.0	235.5*	.33
An	0.64	0.72	0.0	0.52	0.67	0.0	n.s.	.07
Art	0.72	1.09	0.0	0.60	0.77	0.0	n.s.	.09
Ay	0.44	0.63	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.27
Bl	0.28	0.45	0.0	0.24	0.40	0.0	n.s.	.05
Bt	2.48	1.26	2.0	2.16	1.42	2.0	n.s.	.12
Cg	2.56	1.55	2.0	2.20	1.26	2.0	n.s.	.04
Cl	0.16	0.27	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.12
Ex	0.00	0.00	0.0	0.12	0.21	0.0	n.s.	.25
Fd	1.00	0.80	1.0	0.76	0.79	0.0	n.s.	.13
Fi	0.40	0.48	0.0	0.52	0.67	0.0	n.s.	.01
Ge	0.16	0.27	0.0	0.32	0.44	0.0	n.s.	.19
Hh	1.00	0.96	1.0	0.68	0.76	0.0	n.s.	.13
Ls	0.28	0.45	0.0	0.32	0.51	0.0	n.s.	.01
Na	0.68	0.76	0.0	0.36	0.52	0.0	n.s.	.16
Sc	0.56	0.67	0.0	0.40	0.54	0.0	n.s.	.08

大学生における自己愛傾向とロールシャッハ変数との関連 (川崎 貴仁・明翫 光宜)

	低群 (N=25)			高群 (N=25)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
Sx	0.08	0.15	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.08
Xy	0.16	0.27	0.0	0.20	0.34	0.0	n.s.	.01
Idio	0.32	0.44	0.0	0.40	0.61	0.0	n.s.	.07
DV1	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
DV2	0.00	0.00	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.26
INC1	0.60	0.67	0.0	0.28	0.47	0.0	230*	.28
INC2	0.16	0.27	0.0	0.20	0.37	0.0	n.s.	.11
DR1	0.12	0.22	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.09
DR2	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
FAB1	0.36	0.55	0.0	0.12	0.22	0.0	n.s.	.22
FAB2	0.00	0.00	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.14
ALOG	0.00	0.00	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.20
CONTAM	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
AB	0.12	0.21	0.0	0.12	0.22	0.0	n.s.	.06
AG	0.16	0.27	0.0	0.20	0.32	0.0	n.s.	.05
COP	0.16	0.27	0.0	0.20	0.32	0.0	n.s.	.05
CP	0.08	0.15	0.0	0.12	0.22	0.0	n.s.	.08
MOR	0.92	0.88	1.0	0.80	0.70	1.0	n.s.	.02
PER	0.44	0.63	0.0	0.60	0.77	0.0	n.s.	.10
PSV	0.08	0.15	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	.20
GHR	2.48	1.62	2.0	2.48	1.49	2.0	n.s.	.01
PHR	2.40	1.55	2.0	1.92	1.50	1.0	n.s.	.19
Sum6	1.24	1.19	1.0	0.88	1.06	0.0	n.s.	.20
WSum6	3.68	3.56	2.0	3.04	4.14	0.0	n.s.	.21
S-CON	4.64	1.57	5.0	4.76	1.23	5.0	n.s.	.04
PTI	0.12	0.22	0.0	0.36	0.60	0.0	n.s.	.13
DEPI	4.16	1.10	4.0	4.28	0.91	5.0	n.s.	.08
CDI	3.24	0.83	3.0	3.60	0.94	3.0	n.s.	.16
HIV	0.08	0.15	0.0	0.16	0.27	0.0	n.s.	.12
OBS	0.04	0.08	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	.14

*...p<.05 **...p<.01

Table 3 注目賞賛欲求得点の高低群におけるロールシャッハ変数の比較

	低群 (N=26)			高群 (N=24)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
R	23.85	6.96	20.0	20.13	3.59	19.0	n.s.	.19
W	11.35	4.76	11.0	11.00	4.00	11.0	n.s.	0.00
D	9.19	3.76	9.0	6.67	2.92	6.5	n.s.	.26
Dd	3.31	1.99	3.0	2.46	1.49	2.0	n.s.	.16
S	2.77	1.85	2.0	2.25	1.29	2.0	n.s.	.06
DQ+	3.12	2.30	2.0	2.83	1.96	2.0	n.s.	.02
DQo	18.19	5.24	16.5	14.50	2.83	13.5	193*	.33
DQv/+	0.35	0.53	0.0	0.33	0.50	0.0	n.s.	.02
DQv	2.31	1.49	2.0	2.46	1.41	2.0	n.s.	.04
FQ+	0.50	0.77	0.0	0.29	0.46	0.0	n.s.	.04
FQo	12.31	2.51	12.0	11.63	2.31	11.0	n.s.	.10
FQu	7.46	3.60	5.5	5.54	2.55	5.0	n.s.	.23
FQ-	3.77	2.35	3.0	2.58	1.85	2.0	n.s.	.22
M	1.88	1.58	1.5	1.33	1.28	1.0	n.s.	.13
FM	2.58	1.54	2.0	1.83	1.32	1.0	n.s.	.22
m	1.46	1.15	1.0	1.08	0.97	1.0	n.s.	.17

	低群 (N=26)			高群 (N=24)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
FC	3.96	1.12	4.0	3.67	1.44	4.0	n.s.	.08
CF	1.54	1.12	1.0	1.08	1.13	0.5	n.s.	.23
C	0.31	0.50	0.0	0.25	0.40	0.0	n.s.	.02
Cn	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
WSumC	3.98	1.44	3.5	3.29	1.48	3.0	n.s.	.20
FC'	2.31	1.17	2.0	2.63	1.54	2.5	n.s.	.09
C'F	0.12	0.20	0.0	0.25	0.44	0.0	n.s.	.03
C'	0.04	0.07	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.01
WSumC'	2.46	1.22	2.0	2.92	1.67	2.5	n.s.	.11
FT	0.54	0.62	0.0	0.63	0.83	0.0	n.s.	.05
TF	0.04	0.07	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.01
T	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
WSumT	0.58	0.62	0.0	0.67	0.89	0.0	n.s.	.06
FV	0.31	0.47	0.0	0.38	0.56	0.0	n.s.	.03
VF	0.00	0.00	0.0	0.17	0.28	0.0	260*	.30
V	0.04	0.07	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	.14
SumV	0.35	0.51	0.0	0.54	0.72	0.0	n.s.	.10
FY	1.62	1.12	1.0	1.00	0.75	1.0	n.s.	.23
YF	0.27	0.39	0.0	0.33	0.47	0.0	n.s.	.04
Y	0.04	0.07	0.0	0.17	0.29	0.0	n.s.	.16
SumY	1.92	1.16	2.0	1.50	1.17	1.0	n.s.	.16
F	10.27	4.43	9.0	8.38	2.34	9.0	n.s.	.12
FD	0.65	0.80	0.0	0.54	0.59	0.0	n.s.	.05
Fr	0.27	0.43	0.0	0.33	0.50	0.0	n.s.	.07
rF	0.00	0.00	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.15
(2)ペア	6.81	2.87	6.0	5.29	1.76	5.0	n.s.	.23
3r+(2)/R	0.33	0.10	0.3	0.33	0.13	0.3	n.s.	.01
Lambda	1.03	0.63	0.7	0.88	0.45	0.7	n.s.	.02
EA	5.63	2.56	5.8	4.63	2.03	4.3	n.s.	.16
es	9.35	3.37	9.0	8.54	4.17	8.0	n.s.	.17
D	-1.08	0.95	-1.0	-1.13	1.11	-1.0	n.s.	.04
AdjD	-0.27	0.95	0.0	-0.67	0.94	0.0	n.s.	.01
a	4.35	2.37	3.5	3.46	2.00	3.0	n.s.	.16
p	1.54	1.59	1.0	0.79	1.12	0.0	n.s.	.24
Ma	1.19	1.10	1.0	1.13	1.09	1.0	n.s.	.04
Mp	0.62	0.71	0.0	0.21	0.35	0.0	229*	.28
Intellect	1.12	1.40	0.0	1.21	1.31	0.5	n.s.	.08
Zf	13.23	5.42	12.5	11.67	4.42	10.0	n.s.	.08
Zd	-0.08	3.27	-0.3	0.71	3.32	1.3	n.s.	.16
ColShdBld	0.81	0.81	0.5	0.46	0.61	0.0	n.s.	.16
Afr	0.57	0.18	0.5	0.60	0.20	0.5	n.s.	.01
Popular	3.12	0.92	3.0	2.92	0.85	3.0	n.s.	.08
X+%	0.56	0.10	0.6	0.62	0.13	0.6	n.s.	.23
WDA%	0.86	0.08	0.9	0.89	0.09	0.9	n.s.	.16
XA%	0.85	0.07	0.8	0.87	0.09	0.9	n.s.	.14
X-%	0.15	0.07	0.2	0.15	0.11	0.1	n.s.	.11
Xu%	0.29	0.08	0.3	0.26	0.08	0.3	n.s.	.14
S-%	0.16	0.21	0.0	0.07	0.11	0.0	n.s.	.13
Isolate	0.17	0.08	0.1	0.20	0.10	0.2	n.s.	.19
H	1.50	1.23	1.0	1.25	1.17	1.0	n.s.	.10
(H)	1.04	0.90	1.0	0.92	0.84	1.0	n.s.	.07
Hd	1.65	1.34	1.0	1.42	1.21	1.0	n.s.	.10
(Hd)	0.65	0.75	0.0	0.38	0.53	0.0	n.s.	.13
Hx	0.12	0.20	0.0	0.38	0.69	0.0	n.s.	.05

大学生における自己愛傾向とロールシャッハ変数との関連 (川崎 貴仁・明翫 光宜)

	低群 (N=26)			高群 (N=24)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
AllH	5.19	2.91	4.0	4.54	2.30	4.0	n.s.	.07
A	7.54	2.39	7.0	6.63	2.10	7.0	n.s.	.10
(A)	0.38	0.47	0.0	0.50	0.63	0.0	n.s.	.02
Ad	2.65	1.55	2.0	1.67	1.64	1.0	n.s.	.27
(Ad)	0.04	0.07	0.0	0.58	0.83	0.0	231*	.35
An	0.81	0.75	1.0	0.33	0.50	0.0	217*	.30
Art	0.69	1.07	0.0	0.63	0.78	0.0	n.s.	.11
Ay	0.35	0.51	0.0	0.17	0.31	0.0	n.s.	.23
Bl	0.27	0.43	0.0	0.25	0.42	0.0	n.s.	.03
Bt	2.58	1.31	2.0	2.04	1.31	2.0	n.s.	.18
Cg	2.42	1.33	2.0	2.33	1.47	2.0	n.s.	.06
Cl	0.12	0.20	0.0	0.13	0.22	0.0	n.s.	.02
Ex	0.04	0.07	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.09
Fd	0.92	0.64	1.0	0.83	0.97	0.0	n.s.	.19
Fi	0.46	0.53	0.0	0.46	0.61	0.0	n.s.	.08
Ge	0.27	0.39	0.0	0.21	0.33	0.0	n.s.	.07
Hh	1.00	1.00	0.5	0.67	0.72	0.0	n.s.	.11
Ls	0.23	0.39	0.0	0.38	0.56	0.0	n.s.	.12
Na	0.46	0.67	0.0	0.58	0.63	0.0	n.s.	.18
Sc	0.46	0.60	0.0	0.50	0.63	0.0	n.s.	.05
Sx	0.08	0.14	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.07
Xy	0.12	0.20	0.0	0.25	0.40	0.0	n.s.	.13
Idio	0.27	0.39	0.0	0.46	0.65	0.0	n.s.	.04
DV1	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
DV2	0.00	0.00	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.21
INC1	0.46	0.57	0.0	0.42	0.66	0.0	n.s.	.13
INC2	0.08	0.14	0.0	0.29	0.49	0.0	n.s.	.14
DR1	0.12	0.21	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.08
DR2	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
FAB1	0.35	0.53	0.0	0.13	0.23	0.0	n.s.	.20
FAB2	0.00	0.00	0.0	0.08	0.16	0.0	n.s.	.15
ALOG	0.04	0.07	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.01
CONTAM	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
AB	0.04	0.07	0.0	0.21	0.35	0.0	n.s.	.21
AG	0.27	0.39	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.24
COP	0.23	0.36	0.0	0.13	0.22	0.0	n.s.	.14
CP	0.15	0.28	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.08
MOR	1.04	0.90	1.0	0.67	0.67	0.5	n.s.	.16
PER	0.54	0.75	0.0	0.50	0.67	0.0	n.s.	.01
PSV	0.08	0.14	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	.19
GHR	2.58	1.79	2.0	2.38	1.30	2.0	n.s.	.02
PHR	2.54	1.74	2.0	1.75	1.27	1.0	n.s.	.21
Sum6	1.04	1.13	0.0	1.08	1.13	0.5	n.s.	0.00
WSum6	3.19	3.64	0.0	3.54	4.27	0.0	n.s.	.03
S-CON	4.54	1.38	4.5	4.88	1.40	5.0	n.s.	.10
PTI	0.15	0.27	0.0	0.33	0.58	0.0	n.s.	.03
DEPI	4.15	1.05	4.0	4.29	0.96	4.5	n.s.	.08
CDI	3.12	0.83	3.0	3.75	0.85	4.0	207*	.30
HIV	0.12	0.20	0.0	0.13	0.22	0.0	n.s.	.02
OBS	0.04	0.07	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	.14

*...p<.05 **...p<.01

Table 4 自己主張得点の高低群におけるロールシャッハ変数の比較

	低群 (N=26)			高群 (N=24)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
R	21.69	5.63	18.5	22.46	5.57	20.5	n.s.	.10
W	11.65	4.73	11.5	10.67	4.00	10.5	n.s.	.05
D	7.54	3.31	8.0	8.46	3.87	8.0	n.s.	.04
Dd	2.50	1.54	2.0	3.33	1.97	3.0	n.s.	.16
S	2.81	1.49	2.0	2.21	1.55	1.5	n.s.	.22
DQ+	2.69	2.21	2.0	3.29	2.06	2.0	n.s.	.16
DQo	16.23	3.95	15.0	16.63	4.73	15.5	n.s.	.01
DQv/+	0.31	0.47	0.0	0.38	0.56	0.0	n.s.	.04
DQv	2.58	1.54	2.0	2.17	1.35	2.0	n.s.	.07
FQ+	0.31	0.52	0.0	0.50	0.71	0.0	n.s.	.16
FQo	11.35	2.22	11.0	12.67	2.42	12.5	n.s.	.27
FQu	6.81	3.35	5.0	6.25	3.02	5.5	n.s.	.03
FQ-	3.12	2.07	3.0	3.29	2.22	3.0	n.s.	.02
M	1.27	1.43	0.0	2.00	1.42	1.5	n.s.	.27
FM	1.96	1.27	2.0	2.50	1.67	2.0	n.s.	.12
m	1.15	1.08	1.0	1.42	1.07	1.0	n.s.	.16
FC	3.88	1.36	4.0	3.75	1.21	4.0	n.s.	.08
CF	1.35	1.40	1.0	1.29	0.89	1.0	n.s.	.08
C	0.38	0.59	0.0	0.17	0.28	0.0	n.s.	.10
Cn	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
WSumC	3.87	1.86	3.0	3.42	1.08	3.3	n.s.	.06
FC'	2.42	1.26	2.0	2.50	1.50	2.0	n.s.	0.00
C'F	0.04	0.07	0.0	0.33	0.53	0.0	n.s.	.26
C'	0.04	0.07	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.01
WSumC'	2.50	1.27	2.0	2.88	1.63	2.5	n.s.	.06
FT	0.73	0.84	0.0	0.42	0.56	0.0	n.s.	.12
TF	0.00	0.00	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.21
T	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
WSumT	0.73	0.84	0.0	0.50	0.63	0.0	n.s.	.08
FV	0.19	0.33	0.0	0.50	0.67	0.0	n.s.	.21
VF	0.04	0.07	0.0	0.13	0.22	0.0	n.s.	.16
V	0.04	0.07	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	.14
SumV	0.27	0.43	0.0	0.63	0.73	0.0	n.s.	.24
FY	1.04	0.90	1.0	1.63	0.96	1.5	211*	.29
YF	0.15	0.26	0.0	0.46	0.53	0.0	228*	.30
Y	0.04	0.07	0.0	0.17	0.29	0.0	n.s.	.16
SumY	1.23	0.86	1.0	2.25	1.25	2.5	184.5*	.36
F	9.62	3.22	9.0	9.08	3.60	8.5	n.s.	.08
FD	0.42	0.59	0.0	0.79	0.73	1.0	n.s.	.20
Fr	0.31	0.47	0.0	0.29	0.46	0.0	n.s.	.02
rF	0.00	0.00	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.15
(2) ベア	5.38	1.86	5.0	6.83	2.82	6.0	n.s.	.21
3r+(2)/R	0.30	0.11	0.3	0.35	0.11	0.4	n.s.	.20
Lambda	1.12	0.65	0.8	0.78	0.41	0.7	n.s.	.18
EA	4.94	2.48	4.8	5.38	2.31	4.5	n.s.	.09
es	7.85	3.73	6.0	10.17	3.54	9.5	203.5*	.30
D	-0.88	1.04	-0.5	-1.33	1.06	-1.0	n.s.	.19
AdjD	-0.58	0.74	0.0	-0.33	1.17	0.0	n.s.	.05
a	3.35	1.94	2.5	4.54	2.42	4.0	n.s.	.22
p	1.00	1.31	0.0	1.38	1.50	0.5	n.s.	.14
Ma	0.92	1.07	0.0	1.42	1.10	1.0	n.s.	.23
Mp	0.31	0.47	0.0	0.54	0.68	0.0	n.s.	.16

大学生における自己愛傾向とロールシャッハ変数との関連 (川崎 貴仁・明翫 光宜)

	低群 (N=26)			高群 (N=24)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
Intellect	1.31	1.70	0.0	1.00	1.00	0.5	n.s.	.07
Zf	12.69	5.28	11.0	12.25	4.71	11.0	n.s.	.02
Zd	0.06	3.79	0.5	0.56	2.85	0.8	n.s.	.04
ColShdBld	0.46	0.60	0.0	0.83	0.83	0.5	n.s.	.04
Afr	0.60	0.21	0.5	0.57	0.16	0.5	n.s.	0.00
Popular	3.12	0.85	3.0	2.92	0.93	3.0	n.s.	.06
X+%	0.57	0.11	0.6	0.61	0.13	0.6	n.s.	.14
WDA%	0.86	0.09	0.9	0.88	0.08	0.9	n.s.	.09
XA%	0.86	0.09	0.9	0.87	0.08	0.9	n.s.	.06
X-%	0.14	0.09	0.1	0.16	0.10	0.1	n.s.	.01
Xu%	0.30	0.09	0.3	0.25	0.08	0.3	n.s.	.12
S-%	0.12	0.17	0.0	0.11	0.16	0.0	n.s.	.05
Isolate	0.19	0.09	0.2	0.18	0.10	0.2	n.s.	0.00
H	1.46	1.22	1.0	1.29	1.23	1.0	n.s.	.07
(H)	0.77	0.83	0.0	1.21	0.94	1.0	n.s.	.19
Hd	1.19	0.99	1.0	1.92	1.49	1.0	n.s.	.21
(Hd)	0.42	0.55	0.0	0.63	0.78	0.0	n.s.	.04
Hx	0.08	0.14	0.0	0.42	0.73	0.0	n.s.	.08
AllH	4.15	2.36	3.0	5.67	2.83	5.0	n.s.	.25
A	7.00	2.08	7.0	7.21	2.29	7.5	n.s.	.12
(A)	0.50	0.62	0.0	0.38	0.47	0.0	n.s.	.04
Ad	2.58	1.71	2.0	1.75	1.58	1.5	n.s.	.19
(Ad)	0.19	0.36	0.0	0.42	0.63	0.0	n.s.	.22
An	0.58	0.71	0.0	0.58	0.68	0.0	n.s.	.03
Art	0.85	1.17	0.0	0.46	0.65	0.0	n.s.	.06
Ay	0.31	0.52	0.0	0.21	0.33	0.0	n.s.	.05
Bl	0.27	0.43	0.0	0.25	0.42	0.0	n.s.	.03
Bt	2.42	1.37	2.0	2.21	1.34	2.0	n.s.	.06
Cg	2.38	1.32	2.0	2.38	1.49	2.0	n.s.	.03
Cl	0.15	0.26	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.11
Ex	0.04	0.07	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.09
Fd	0.96	0.81	1.0	0.79	0.79	0.5	n.s.	0.00
Fi	0.35	0.45	0.0	0.58	0.68	0.0	n.s.	.10
Ge	0.23	0.36	0.0	0.25	0.38	0.0	n.s.	.02
Hh	1.12	0.92	1.0	0.54	0.72	0.0	212.5*	.30
Ls	0.27	0.43	0.0	0.33	0.53	0.0	n.s.	.03
Na	0.54	0.70	0.0	0.50	0.63	0.0	n.s.	.04
Sc	0.27	0.41	0.0	0.71	0.71	0.5	224.5*	.28
Sx	0.04	0.07	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.09
Xy	0.19	0.31	0.0	0.17	0.29	0.0	n.s.	.08
Idio	0.27	0.39	0.0	0.46	0.65	0.0	n.s.	.04
DV1	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
DV2	0.00	0.00	0.0	0.08	0.15	0.0	n.s.	.21
INC1	0.35	0.53	0.0	0.54	0.68	0.0	n.s.	.14
INC2	0.12	0.20	0.0	0.25	0.44	0.0	n.s.	.02
DR1	0.12	0.21	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.08
DR2	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
FAB1	0.31	0.50	0.0	0.17	0.29	0.0	n.s.	.10
FAB2	0.00	0.00	0.0	0.08	0.16	0.0	n.s.	.15
ALOG	0.04	0.07	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.01
CONTAM	0.00	0.00	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	0.00
AB	0.08	0.14	0.0	0.17	0.29	0.0	n.s.	.08
AG	0.08	0.14	0.0	0.29	0.41	0.0	n.s.	.28

	低群 (N=26)			高群 (N=24)			U-test	効果量 (r)
	平均	SD	Me	平均	SD	Me		
COP	0.08	0.14	0.0	0.29	0.41	0.0	n.s.	.28
CP	0.00	0.00	0.0	0.21	0.36	0.0	n.s.	.26
MOR	0.96	0.89	1.0	0.75	0.69	1.0	n.s.	.07
PER	0.46	0.67	0.0	0.58	0.73	0.0	n.s.	.10
PSV	0.04	0.07	0.0	0.04	0.08	0.0	n.s.	.01
GHR	2.04	1.29	2.0	2.96	1.63	2.5	n.s.	.25
PHR	1.85	1.22	1.0	2.50	1.88	1.0	n.s.	.10
Sum6	0.92	1.14	0.0	1.21	1.16	1.0	n.s.	.13
WSum6	3.04	3.74	0.0	3.71	4.23	2.0	n.s.	.06
S-CON	4.65	1.37	5.0	4.75	1.44	5.0	n.s.	.05
PTI	0.15	0.28	0.0	0.33	0.56	0.0	n.s.	.13
DEPI	4.19	1.08	4.0	4.25	0.94	4.0	n.s.	.04
CDI	3.46	0.89	4.0	3.38	0.89	3.0	n.s.	.05
HIV	0.08	0.14	0.0	0.17	0.28	0.0	n.s.	.14
OBS	0.04	0.07	0.0	0.00	0.00	0.0	n.s.	.14

*...p<.05 **...p<.01

考察

(1) 優越感・有能感得点とロールシャッハ変数との関連

小塩 (1998a) は、優越感・有能感が意味する肯定的感覚は、他者との比較を含むものであるという点が自己価値や自尊心と異なる点であると指摘している。また質問項目を検討すると次の2つの側面に筆者らは注目した。それは他者の存在によって自己の肯定感覚が規定される点と質問項目のほとんどが「～だと思ふ」と思考・観念傾向に関する項目で占められている点である。これは、優越感・有能感尺度が高いほど、優越感・有能感だけでなく、他者への意識や空想傾向も高くなることを示す。

相関分析から、優越感・有能感得点が高くなるとFr (反射反応) とFC (形態色彩反応) は低くなる傾向にあることがわかった。先行研究ではNPD群はFrが高いことが報告されている一方で、本研究結果は逆の結果となっていることが注目される。大学生を対象にした研究では、後藤・明翫 (2020) がECR-GO (中尾・加藤, 2004) の愛着不安得点とFrとの間に負の相関関係が示されたことを報告している。2つの研究を単純に比較できないが、ECR-GOは対人関係における自己観、NPISは他者と比較した形での自己肯定感であり、ともに他者の存在に規定される自己意識を示唆する。ここから、Frは一般大学生においては単に自己愛を示すのではなく、ポジティブな心理学的意味につながる可能性も示唆される。Frは、Exnerの研究開始時期は

自己愛との関連を意味していたが、次第に自分を中心にものを考える人、自分にこだわる人、自分に価値を置く人という理解に変わっていった (藤岡, 1992; 中村, 2010)。反射反応に見られる心理学的意味は、他者と比べることなく、自分だけを点検することによって自己イメージを形成する自己完結の世界にあると藤岡 (1992) は述べている。自己イメージという視点では、Kocan (1991) は被検者が自分自身を理解し受容する感覚を作り上げようとする努力 (すなわち、アイデンティティ確立の試み) をFrから読み取っている。ただし、比較対象となる他者がまだ存在しないのがFrの世界であり、ここにKocan (1991) は、治療者がその二者関係の役割を担うなど心理療法の可能性を見出した。このようにFrは自己理解やアイデンティティの確立の試みが反映されている。藤岡 (1992) は、Frの解釈の意味はケースによって固定化した自己愛的な意味になったり、自我境界の障害として現れたり、思春期のごく健全な一過程など現れ方は異なると述べている。ここから、他者と比較して自己肯定感を形成する優越感・有能感とFrが反映する心理学的意味とは逆になることが説明でき、またFrは大学生の自我が他者の視点にしばられることなく、自分のことを考える場合に産出しやすくなるとも推測できる。

次にFCについて取り上げる。Schachtel (1966 空井・上芝訳 1975) は、FCは形態が優位な決定因であって、色彩も重要ではあるが同等の役割は果たしておらず、F (形態反応) の優位性が能動的かつ

構成的態度を意味していると述べている。FCは、外的な刺激も取り入れつつ、自分なりに捉えた能動的な主体性が優位になることを指す。優越感・有能感尺度が想定する比較対象である他者からある程度自由になることは、「他者は他者。自分は自分」というように自他の境界を区別することであり、能動性の力を必要とする。このような能動性がFCを産出する力と関係することが推測された。

優越感・有能感の高低群の比較からは(Ad)(非現実的動物部分反応)とINC1(不調和な結合。1は軽度の水準を示す)の2変数の特徴が明らかになった。(Ad)は優越感・有能感高群が有意に高かった。西尾・高橋・高橋(2017)の一般日本人成人データを参照すると平均値が0.22, SDが0.51とあり、高群が高い値をとっていることが窺える。非現実的動物反応について片口(1987)は現実逃避的・未熟な傾向を、Meyer, Viglione, Mihura, Erard & Erdberg(2011 高橋監訳・高橋訳 2014)は想像や空想への依存やそれを好む傾向を指摘している。優越感・有能感の尺度項目を検討すると、「私は他人より有能であると思う」や「私は、周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている」など他者と比較した仮想的な有能感が多く含まれている。ここから優越感・有能感と(Ad)に反映されるような空想傾向や非現実感の解釈仮説との関連性を指摘することが可能である。INC1については、西尾・高橋・高橋(2017)の一般日本人成人データを参照すると平均値が0.23, SDが0.53とあり、低群が高い値をとっていることが窺える。INC1は単純な認知の誤り、制止の弛緩、故意の遊戯的または創造的な試みを表現している(Meyer et al., 2011)。片口法でいえば、多くが許容水準の反応に該当する。片口(1987)によれば、許容水準の反応は、被検者がいくらか気を抜いた状態で答えを与えたり、プロットを適切にまとめることに失敗したり、消極的・回避的な態度で反応するとき生じやすいとされる。さらに1つのロールシャッハ・プロトコルに許容水準の反応が適当な割合で存在することがむしろ望ましく、適度な緊張の緩和と弛緩を反映する(片口, 1987)。INC1は、このような心性として理解することが可能である。低群の自己意識が他者の存在にあまりとらわれないという点でいえば、FrやFCと同じくINC1の高さは他者の存在を気にすることなく自由に自己表現できる傾向を示していると考えられる。

ロールシャッハ変数との関連から、優越感・有能

感の高い青年は空想的な優越感・有能感を抱えながらも、他者の存在によって自己の体験や表現が委縮する傾向があると考えられた。

(2) 注目賞賛欲求得点とロールシャッハ変数との関連

小塩(1999)によれば、注目賞賛欲求尺度は過剰な賞賛を求める記述に相当し、自分が他者に注目されたり、賞賛されることを期待する項目からなっており、少数であるが権威志向の意味合いを含んだ項目も存在する。

相関分析では、Y(濃淡拡散反応)、(Ad)、AB(抽象反応)、PTI(知覚と思考の指標)との間に正の相関関係が、Bt(植物反応)、PSV(固執反応)との間に負の相関関係が認められた。注目賞賛欲求をめぐる不安感や細かな濃淡のニュアンスをくみ取る感受性がYに、その欲求による空想の強さや空想への逃避傾向がPTI、(Ad)、ABの変数に関連すると考えられた。負の相関関係にあった変数に着目すると、Btは対人世界を表現しないことが多いため、孤立指標の中に位置づけられるが、他者のことがあまり気にならないという心性や受動的な対人態度とも関連するかもしれない。PSVは同じ種類の反応を繰り返して産出する傾向があるが、自分のスタイルにこだわるなど反応産出の構えと関連すると考えられた。

注目賞賛欲求の高低群の比較からは以下の変数の特徴が明らかになった。注目賞賛欲求高群に特徴的であった変数は、VF(濃淡立体形態反応)、Mp(人間運動反応、かつ消極的な運動)、(Ad)、CDI(対処能力不全指標)である。CDIは西尾・高橋・高橋(2017)の一般日本人成人データを参照すると平均値が2.68, SDが1.27とあり、高群の平均値3.75は高い値となる。CDIはM反応や色彩反応が少ないと相対的に高くなる指標であるが、本研究ではこれらの変数に有意差は認められないものの、いずれも高群の方が低いことから総じてCDIが有意に高くなったと推測される。M反応や色彩反応が低くなったのは、優越感・有能感と同様に他者の視点に規定されやすく、委縮する体験様式が反映されたものと考えられた。Mpについて西尾・高橋・高橋(2017)の一般日本人成人データを参照すると、平均値が1.75でSD1.48であり、むしろ高群の低さ(平均値0.21, SD0.35)が目立つ結果となった。Mpは困難な状況に対処できず、現実逃避や空想にふける

傾向があること、責任を回避し、他者に依存し、行動が優柔不断になりやすいと言われている（高橋・高橋・西尾，1998）。高群はこれらの傾向が低く、他者との関係性の世界に能動的にかかわる傾向が推測された。

注目賞賛欲求高群において、優越感・有能感と同様に（Ad）が有意に高かった点について筆者らは注目した。注目賞賛欲求の尺度項目は、「私は、どちらかといえば注目される人間になりたい」、「私は、人々の話題になるような人間になりたい」などと空想傾向を示す項目であり、非現実感と空想傾向の高さを推測できる。さらに、多少の不快感・不満足感を伴いながら自己や他者および対人関係を内省すると考えられているVF反応（Meyer et al., 2011）が有意に高くなったのも興味深い結果となった。細木（1972）はVの強調について、内的不充足感や傷つきやすさを抱えながらもそれを空間的背景、つまり社会的枠組みの中に組み入れようとする適応力と解釈し、それがアイデンティティ確立への努力の表れと述べている。ロールシャッハ変数の解釈から、注目賞賛欲求の高い青年の特徴として、他者の視点を意識し、その存在に委縮しながらも他者と関わり、同時に非現実的空想を抱きながら、自己理解を模索していると捉えることが可能である。

注目賞賛欲求低群に特徴的であった変数は、DQo（発達水準のスコアで普通反応：特定の形態を持つ対象がみられること）、An（解剖反応）であった。DQo、Anのいずれの数値も低群では有意に高かった。DQoとAnは、他者の存在があまり気にならない青年が複雑なことをなるべく避けるように反応産出する傾向（高橋・高橋・西尾，1998）や自己の身体への関心が出やすいと考えられた。

ロールシャッハ変数と注目賞賛欲求の関連から、自己愛傾向の高い青年は他者の賞賛を求める欲求に関連して不安感や劣等感を抱えつつ、対人関係の場に入っていく、周囲を注意深く捉えたり、自己内省する傾向を窺うことが出来た。さらに空想的になりやすく、仮想的・非現実的な解釈につながりやすいことも推測することができた。

(3) 自己主張得点とロールシャッハ変数との関連

小塩（1998a）によれば、自己主張尺度は、自分の意見をはっきりと言い、自分で決断すること、やや自己中心的という言葉で表すことのできるような内容の項目からなっている。控え目ではない点で注

目賞賛欲求と共通しているが、自己主張尺度は能動的・積極的な項目群から構成されている点特徴である（小塩，1998a）。

相関分析では、SumY（濃淡拡散反応の和）、X+%（形態の使用が適切かつよく見られる反応の割合）は有意な正の相関関係、Hh（家財道具反応）が有意な負の相関関係にあった。また自己主張高群で有意だった変数はFY（濃淡形態拡散反応）、YF（濃淡拡散形態反応）、SumY、es（刺激体験。まとものない思考やネガティブな感情からの影響）、Sc（科学に関する反応内容）であり、Hhについてのみ低群が有意に高かった。濃淡拡散反応（FY、YF、SumY）が自己主張高群に高かったこと、X+%が自己主張得点と正の相関関係にあったことから、濃淡拡散反応を単に不安感の現れを考えるよりは、Meyer et al. (2011) のいうプロットの細かな濃淡特徴を捉えられるためある種の認知能力の現れと捉えることも可能だと思われる。esの高さは、この指標を構成する濃淡拡散反応の高さが反映されたものと考えられる。自己主張得点の尺度項目は、他者を意識しつつ、自己主張をやり抜くニュアンスが含まれることから、Y系の反応に示される感受性と認知能力の高さがみられたと思われる。

ロールシャッハ変数との関連から自己主張の高い青年は、形態水準に代表されるように現実検討力の高さと状況の細かなニュアンスをくみ取る感受性や認知能力の高さが窺えた。

(4) NPDのロールシャッハ研究との関連

NPDのロールシャッハ研究は、日本では事例が少なく、海外の知見に頼らざるを得ない状況にある。海外の研究においても、精神力動的視点による内容分析から自己愛的特徴を述べている研究が、包括システムで自己への関心に関する指標（反射反応や自己中心性指標）との関連に絞り込んだ研究であり、基礎的なロールシャッハ変数の知見がみられない点が課題といえる。

本研究では、Hilsenroth et al. (1997) や Gritti et al. (2018) の研究で有意とされたロールシャッハ変数（反射反応、自己中心性指標、理想化）の中で反射反応のみ有意な関連が見られた。しかし、本論に述べてきたようにそこで考えられる解釈的意味としては、自己愛的に自己に焦点づけられるよりは、他者を意識しながらもアイデンティティを模索する青年の心性を捉えた反応様式であった。Kathleen

(2000) は、自己愛のスコア (反射反応, 理想化) が大学生 196 名のデータにおいても再現されなかったが、本研究でも NPD 研究に示唆される結果は再現されなかった。以下、仮説的に NPD ではない自己愛傾向の高い一般青年のロールシャッハ反応の一覧を示す。NPD に示される自己愛と健全な若者に示される自己愛には構造的な違いがあると示唆される。NPD は、診断基準から自己愛的な空想や期待などの幻想の世界に閉じこもり、現実を見ないようにしている点が中核的な病理であった (杉村, 2011)。NPD のロールシャッハ研究で知見はみられないが、本研究で自己愛的傾向の高い大学生が Fr ではなく、VF や Y を示していることが一つの知見となった。ロールシャッハ反応において VF や Y がみられることは、現実での対人関係の中での不安や劣等感を感じ、それらを否認することなく意識化できることを示すからである。今後、NPD との実証的な比較が必要になるであろう。

- ・ (Ad) の高さ: 空想傾向
- ・ Mp の低さ: 現実回避の傾向は少ない
- ・ VF の高さ: 劣等感を抱きつつ対人関係を内省
- ・ FY の高さ: 不安感や感受性
- ・ CDI の高さ: 対処能力の制限, 委縮した体験様式

おわりに

本研究から、青年期の自己愛傾向として以下の特徴を捉えることが出来た。1 つは先行研究で指摘されてきた NPD のロールシャッハ反応と一般大学生の自己愛傾向におけるロールシャッハ反応とは構造的な違いがみられることである。つまり、Fr, 自己中心性指標, PER と自己愛傾向と関連が認められず、(Ad), VF, FY, CDI が高かった点である。

次に大学生の自己愛傾向とロールシャッハ変数との関連から以下のような青年期像が窺えた。(1) 優越感・有能感の高い青年は空想的な優越感・有能感の抱えながらも、他者の存在によって規定される点、(2) 注目賞賛欲求の高い青年は、他者の賞賛を求める欲求に関連して不安感や劣等感を抱えつつ、対人関係の場に入っていく、周囲を注意深く捉えたり、自己内省すること。さらに空想傾向が高いことから、仮想的・非現実的な解釈につながりやすい点、(3) 自己主張の高い青年は、現実検討力が高いと同時に状況の細かなニュアンスをくみ取る感受性

の高さ、である。

本研究の限界点として、先行研究で指摘されてきた Lerner (1998) の理想化について検討できなかった点が挙げられる。この点については再検討が必要になるだろう。また一般大学生の自己愛特性に関するロールシャッハ研究は筆者らの知る限りでは本研究を入れて 2 点である。今後、本研究の知見の再現性も含めた研究の蓄積が必要になると思われる。

謝辞

本論文は、筆者 (川崎) が 2019 年度に中京大学大学院心理学研究科に提出した修士論文の一部を筆者らが再分析を行ったものである。本研究の質問紙調査、個別調査に快く参加していただいた研究参加者の方々、日々の議論を通じて多くのご意見やご示唆を頂いたゼミおよび大学院同期生の皆様に心から感謝致します。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Association. (日本精神神経学会 (日本語版用語監修) 高橋三郎・大野裕 (監修) 染谷俊之・神庭重信・尾崎紀夫・三村将・村井俊哉 (訳) 2014 DSM-5—精神疾患の診断・統計マニュアル—医学書院)
- Blais, M. A., Hilsenroth, M. J., Castlebury, F., Fowler, J. C., & Baity, M. R. (2001). Predicting DSM-IV cluster B personality disorder criteria from MMPI-2 and Rorschach data: A test of incremental validity. *Journal of Personality Assessment*, 76, 150-168.
- Blos, P. (1962). *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free press. (プロス, P. 野沢英司 (訳) 1971 青年期の精神医学 誠信書房)
- Exner, E.J. (1995). *Rorschach Form Quality Pocket Guide*. Rorschach Workshops. (エクスナー, E. J. 中村紀子・津川律子・店網永美子・丸山香 (共訳) 2002 ロールシャッハ形態水準ポケットガイド (改訂版第 3 版) エクスナー・ジャパン・アソシエイツ)
- Exner, E. J. (2003). *The Rorschach: A Comprehensive System Volume 1 Basic Foundations and Principles of Interpretation* (Fourth ed.). Hoboken: John Wiley & Sons. (エクスナー, E. J. 中村紀子・野田昌道 (監訳) 2009 ロールシャッハ・テスト—包括システムの基礎と解釈の原理 金剛出版)
- 藤岡淳子 (1992). 関東地区シンポジウム (エクスナーによるロールシャッハ・テストの反射反応をめぐって) におけるコメント. *犯罪心理学研究*, 30 (20), 31-63.
- Gritti, E. S., Marino, D. P., Lang, M., & Meyer, G. J. (2018). Assessing narcissism using Rorschach-based imagery and behavior validated by clinician reports: Studies with adult patients and nonpatients. *Assessment*, 25

- (7), 898-916.
- 後藤宥乃・明翫光宣(2020). 愛着スタイルとロールシャッハ反応との関連. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 19 (1), 9-21.
- Hilsenroth, M. J., Handler, L., & Blais, M. A. (1996). Assessment of narcissistic personality disorder: A multi-method review. *Clinical Psychology Review*, 16, 655-683.
- Hilsenroth, M. J., Fowler, J. C., Padawer, J. R., & Handler, L. (1997). Narcissism in the Rorschach revisited: Some reflections on empirical data. *Psychological Assessment*, 9, 113-121.
- 堀内和美・星野和実・森田美弥子・池田博和・吉井健治・城野靖江・石川雅健(1991). 自己愛人格障害のロールシャッハ反応. 日本心理臨床学会第10回大会発表論文集, 344-345.
- 細木照敏(1972). ロールシャッハ・テストにおける立体反応 (Vista) の精神医学的意味. 精神医学, 15 (2), 29-37.
- 市橋秀夫(2004). 自己愛性人格障害. 日本外来臨床精神医学, 2 (1), 37-46.
- 片口安史(1987). (改訂) 新・心理診断法 金子書房
- Kathleen, J. K. (2000). Measures of narcissism in the Rorschach: A systematic replication of reflection responses and idealization scores using a college sample. *Dissertation Abstracts International*, 60 (8), 4286-4287.
- 川崎直樹(2019). 自己愛をめぐる実践研究と実証研究の交差—理解と支援のための仮説モデル構築に向けて— 教育心理学年報, 58, 167-184.
- Kocan, M. (1991). Changes in self- and object representation as revealed by reflection response. *Journal of personality assessment*, 56 (1), 35-44.
- Lerner, P. M. (1998). *Psychoanalytic Perspective on the Rorschach*. Hillsdale: The Analytic Press (ラーナー, P. M. 溝口純二・菊地道子 (監訳) 2003 ロールシャッハ法と精神分析的視点—(上) 臨床基礎編・(下) 臨床研究編— 金剛出版)
- Meyer, G. J., Viglione, D. J., Mihura, J. L., Erard, R. E., & Erdberg, P. (2011). *Rorschach Performance Assessment System: Administration, coding, interpretation, and technical manual*. Toledo: Rorschach Performance Assessment System (マイヤー, G. J., ビグリオン, D. J., ミウラ, J. L., エラード, R. E., & エルドバーグ, P. 高橋依子 (監訳) 高橋真理子 (訳) 2014 ロールシャッハ・アセスメント・システム—実施, コーディング, 解釈の手引き— 金剛出版)
- 宮下一博(1991). 青年におけるナルシシズム (自己愛) 的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係. 教育心理学研究, 39 (4), 91-96.
- 中村紀子(2010). ロールシャッハ・テスト講義 I—基礎編— 金剛出版
- 中尾達馬・加藤和生(2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. 九州大学心理学研究, (5), 19-27.
- 七里佳代・橋玲子(1995). Narcissistic Personality Disorder の心理診断について. 新潟医学会雑誌, 109 (4), 191-200.
- Nezworski, M. T., & Wood, J. M. (1995). Narcissism in the Comprehensive System for the Rorschach. *Clinical Psychology Science and Practice*, 2 (2), 179-199.
- 西尾博行・高橋依子・高橋雅春(2017). ロールシャッハ・テスト統計集—数値の比較検討と解釈に役立つ変数データ— 金剛出版
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男(1987). 自己愛的人格の基礎的研究(1)—自己愛人格目録の信頼性と妥当性について— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535.
- 小塩真司(1998a). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司(1998b). 自己愛傾向に関する一研究: 性役割観との関連. 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 45, 45-53.
- 小塩真司(1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連. 性格心理学研究, 8, 1-11.
- Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.
- 齋藤万比古(2011). 子どもの人格発達の障害とは何か 齋藤万比古 (総編集) 笠原麻里 (編) 子どもの人格発達の障害 (pp. 2-21) 中山書店
- 齋藤万比古(2015). 子どもの精神科臨床 星和書店
- Schachtel, E. G. (1966). *Experiential foundations of Rorschach's test*. New York: Basic Books (シャハテル, E. G. 空井健三・上芝功博 (訳) 1975 ロールシャッハ・テストの体験的基礎 みすず書房)
- 杉村共英(2011). 子どもの自己愛の発達とパーソナリティ障害 齋藤万比古 (総編集)・笠原麻里 (編) 子どもの人格発達の障害 (pp. 170-185) 中山書店
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行(1998). 包括システムによるロールシャッハ解釈入門 金剛出版
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行(2002). ロールシャッハ形態水準表 包括システムのわが国への適用 金剛出版